



ギリシヤの小さな幼稚園での二年間

大多和まゆみ檀

① 日本人学校幼稚部へ

一九八二年の四月から八四年の三月までの二年間、ギリシヤはアテネの日本人学校幼稚部に勤務するという体験をしてきました。全く思いもかけないことで、突然の出発となりました。それまで勤務していた幼稚園の四才児の子ども達の「ボク達がいるのにどうして先生、ギリシヤに行くの？」という「重い」言葉をあとにして……。その日本人学校（小中学部＋幼稚部）は、アテネの郊外にあり、道路では、カメがノコノコと歩いていたり、

空地には赤いケシ、黄色い春菊が咲き乱れ、ヤギもいたりする、というのどかな地区の中心地、雑貨屋、薬屋、パン屋があるという一角に位置しています。以前はホテルだったという建物が、小中学部で、その離れ、といった小さな部屋が幼稚部です。（人数は、幼小中合わせて百十名前後です）白いよろい戸付きの窓が付いたかわいらしい部屋で、出入口は一枚のドアです。

② 一年目が終わった時

幼稚部は五才児一クラスのみです。出発前、「一人で

担当することになります」と言われた事に対して何の思いも持たずに出かけましたが、一年間が終って、喜びを分かち合う人がいない、というのはなんとさびしい事かとつくづく思いました。逆に言えば、日本に居た時には喜びを分かち合う人を回りに持っていたんだなあ、と改めて「同僚」の存在を思い知らされました。

仕事の大変さや、困ったりわからない事でも一人で考えなければならぬことは、なんとかやっていきます。でも一人一人の子ども達について、今日こんな事があった、いい顔をしてた、こんな風に変ってきた、とかいう事を語り合う相手がない、というのは本当にさびしいことでした。これは日本に居たら気付かなかった新しい発見の一つです。

③ 保育のこと

私が、幼稚園で子どもに育てたいと思っていること——自分の好きなもの、本を見つけ自分自身に自信が持てる。他の人の存在を知り、その存在も認められる——

は、アテネにいても同じですが、子ども達への接し方は、少し変わったようです。一人一人の子どもが、かわいくてかわいくて「かわいがりまくって」保育をしていました。「先生」というより、「おばさん」という感じでした。なぜそうになったかを考えてみると、

- (1) 一年目は十二名、二年目は四月に八名（のちに十二名）で出発という、教職について初めて経験する少人数。
- (2) ここへ入国する前は、英語系の幼稚園や、ギリシャの幼稚園に行っていた人、どこにも行かずに家に居た人、と「前歴」は様々ですが、前者は、「おかあさん、今度の幼稚園は、先生の言うことが全部わかるよ」後者は、友達と遊べるのが、ひたすらうれしいという様子。
- (3) お母様方は、「よくアテネまで来て下さって……。お友達と楽しく遊べる経験をたくさんさせて下さい。」
- (4) 私自身、何もかも初めての体験ばかりで緊張している中で、子ども達とかかわる事だけは、これまでと変りなく、そこではじめて自分らしさを取り戻すという状態にあった事。

これら(1)~(4)の事が重なって、「かわいくてかわいくて」という思いがより強くなって「かわいがりまくり保育」になったのだと思います。又、ギリシャの生活に關しては子ども達の「後輩」として、そして日本にいたら年長児の遊びを見ていて伝わる、という遊びを伝えるもう一つの「年長児」として接する自分がありました。

子ども達同志は、ちょっと人数の多い「兄弟」という感じでした。子犬の様にたわむれたり、ギリシャの恵まれた自然の中で、くだもの取りをしたり花つみをしたり木登りをしたり。何をするにしても、少人数の良さで、一人一人の持てる力を思う存分出せ、スクールバスで九時四十分頃登園して、一時半に又、バスで帰るまで、フルに遊び込んだ子ども達です。でも、その中での問題点もいくつかありました。

それは、一人一人の良さが皆に行き渡る、という反面、一人が、こうだ、と言うとそれが絶対的なものになってしまうがちなこと。十二名分の良さしか共鳴し合わない。(十二名の限度がある)子どもから子どもへと伝

達していく遊びが、保育者を通さなければならない。従って保育者は、本当の「子ども」にならなければ、単に、十二名の子どもの達の「ガキ大将」になってしまう恐れがあること。私の一人よがりになってしまふのではという心配。こんな問題点を乗り越えていける一つの方法として、他の幼稚園と交流を持ったり、近所の公園に出かけて行って、他の子ども達の遊びを見たり一緒に遊ぶこと、があるのではないかと考えました。私自身、ギリシャ語がよく出来ない、相手の言うことが理解できない、という不安はありましたが、そこは「クソ度胸」、何はともあれやってみなければ、と学校の外にもどんどん出かけて行きました。

④ ギリシャの幼稚園と

あちこち歩いていた頃、思いもかけず、近所の幼稚園(徒歩十五分位の所)から、「是非交流を持ちたい。一度で終り、というのではなく、お互いに、自分の園以外の人を知り、言葉はわからなくても一緒に遊べる、と

「いう体験をさせたいから。」と、とてもハンサムな男の先生が、我幼稚園にやってきたのです。私の方でも願ってもないことでした。子ども達のいる時間に来てくれましたので、一緒に遊び、すっかり、その先生—イリアス先生—が気に入ったようです。「今度遊びにいらっしやいと言っているのよ。」と話しましたら、その喜んだこと、「おみやげ持っていこうよ」という相談になり、カレンダーを作って遊びに出かけました。まず一番の感想は、「ワーッきれい！ ホテルみたい。お庭が広くていいね。」—ここは銀行立の保育園で、施設の貧しさが目立つギリシャの中では、抜群の施設の良さを誇り、三才児から五才児までの四クラスです—イリアス先生はじめ他の先生方、ギリシャの子ども達の「いらっしやい」という言葉に迎えられ、ビックリしつつも、一緒に集団遊びを楽しみ、庭の遊具でも遊び、「今度は幼稚園（自分達の）にも来てもらいたい」と言いつつ帰って来ました。

その後は、こんな時期にはこんな事して遊ぼう、とお互いの計画を合わせ、数回行き来したあと、卒園の前に

は、一緒にピクニックへ。アテネのさらに郊外に、キャンプ地を持っている、というのでそこへ出かけたのです。キャンプ地ということから、私は、バンガロー風の建物がある所をイメージしたのですが、これが大違い。立派な「別荘」で、大きな建物の中には、泊まれる様にベッドのある部屋、食堂などがあります。（サマーキャンプで使うそうです）庭は、建物をかこんで、東西南北に、遊具のある所、様々な花が咲き乱れている所、木のある所、とわかれています。それらの所に散らばって、ギリシャの、日本の子ども達がブランコに乗ったり、花つみをしたりして遊んでいる様子は、私には、まるで映画のシーンのように見えました。

子ども達が、口をモグモグ動かしているの聞いてみると、「クルミだよ、おいしいよ。」これを見て、うれしかったのは、子ども達が、私に聞きに来ることなく、ギリシャの先生に、石でカラを割って食べる、という方法を聞き出し、ギリシャの人が食べるのを見て自分達も口に入れてみた、ということです。異なる人種の人が食べ

⑤ ギリシヤの修了の日

ている物を、自分も口にして確かめるのは大事なことだし、特に高学年になる程、試しませずに、ギリシヤのもの(-)、日本のものは(+)、と決めつけてしまう傾向が見られ、残念に思っていましたので。



▲ギリシヤの保育園の人達が「お客さん」で、買い物に来てくれました。お金の単位は、ドラクマといひます。

東京の公立幼稚園では、「儀式」といふ感じのその日ですが、この保育園では、「参観日」といふ感じですよ。女関で園長先生が親一両親とも、又、おばあちゃん、おじいちゃんも一緒という姿が目立ちましたーを迎えます。我家にお客様を迎えた、という感じ。三三五五集まってきた親や子ども達が外に行きー六月はもう夏なの



▲お店やさんごっこのおと、一緒に集団あそび。

で、もう一つ見た幼稚園もやはり外で行っていました。それぞれの場所に座った所で、園長先生のお話が、親にむかって始まります。それが終ると、三才児から、先生と一緒に、まん中の芝生に出てきて簡単なおどり、次に四才児が、二人で車に乗り二チームで「ヨイドン」最後が終了の五才児でギリシャのフォークダンスを踊ります。全部が終ると、親子で園内に行き、これまでに、子ども達が描いたり作ったりした作品を見てまわり、各自が、自分の作品を台紙ごと（ページュの紙）とって丸め、帰っていくのです。玄関では、そんな親子と先生達が、あちこちで写真をとっている姿も見られましたが、これで修了の日は終り。途中少しも、静かに、とか行儀よく、とか言うこともなく、涙を流す姿もなく、実に、楽しそうに、うれしそうに、帰っていきました。（もう一つの私立幼稚園の方では、日本の「浦島太郎」のフランス語訳をギリシャ語に直して、三才児までが一緒に、オペレッタのような劇をしていました。）

概して、ギリシャ人は、格式ばらず、毎日の生活を楽

しみ、おおらかな人達の様子です。教会での結婚式、洗礼式、独立記念日の式典等でも、いつの間にか始まって、いつの間にか終りになり、それが、幼稚園の修了の日にも現われているのだと思いました。

⑥ 先生達、及び大人と子ども

ギリシャの人達の、こだわりのなさ、おおらかさは、普段の日々でも然りで、私達が、外から「今日は」と声をかけると、全く知らない異国人である私達を、「中にいらっしゃい」と、門をあけて迎えてくれるのです。

保育の中でも、子ども達が外で遊んでいる時には、先生同志かたまっておしゃべりをしています。なぜ一緒に遊ばないのか、と聞くと、逆に、「なぜ一緒に遊ぶ必要があるのか。子ども達で遊んでいるのに。」と、不思議そうに聞かれています。協同で一つの物を作り上げる、遊びに必要なものを作る、という活動も、ほとんど見られません。個が何よりも大切だし、じつくりと物を作るとか、手先の器用さがないので、その面を

育てている」と言っていました。

でも、行事的な事、クリスマス会、カーニバルなどを
する時には、先生達も、子ども達と一緒にになって、それ
を楽しみ、その人の日常生活そのままの姿で、真剣に、
暖かく接しているように見られました。

私のギリシャ語の能力では、この辺までで、ギリシャ
の幼稚園では、子ども達に何を育てようとしているの
か、どんなカリキュラムを持っているのかなどを、話し
合えなかったのは、とても残念でした。

一般に、ギリシャの大人達は、とても子どもをかわい
がります。他の人の子どもにも、必ず、「元気？」と声
をかけたり、私達が歩いていても、「どこから来たの？」
「元気？」「なんとかわいい子ども達！」というように。

子どもの誕生日には、徹底して、一緒に、踊りやゲーム
や会話を楽しめます。でも、その反面、子どもが外で遊
んでいても、親の用事は、有無を言わずやらせますし、
大人の生活に入ってきたり、何かうるさい事を言ったり
すると、大声でしゃべります。赤ちゃんが、長い時間ワァ

ーワァー泣く、というのも見かけませんでした。むずか
って泣くと、「ナーニ、ナーニ」と、やさしくあやすの
です。なんと幸せな子ども達でしょう。「経済力」では、
日本には、はるかに及ばない貧しいギリシャですが、子
ども達の目は、キラキラ輝やいていました。

⑦二年間が終わって

言葉もわからず、生活習慣も全くわからない国で生活
してみて、何もかもはじめてという経験が、「この年」
になって又出来た。ということは、それ自体、とても貴
重な体験でした。家庭を離れ、幼稚園という集団生活を
はじめてする子ども達と同じではないかと。

その体験の中で、自分自身の新たな面も発見しまし
た、大好きになったギリシャの友達もできました。そし
て何よりも、旅立ちの時に、日本を離れていた時に、こ
うして再び帰ってきた時に、なんと、私は、かけがえの
ない親、かけがえのない友たちにかこまれているのか、
と改めて強く強く感じました。(東京・港南幼稚園)